

南港区と信義区の歴史スポットを訪ねる

片倉 佳史

台北の歴史をたどる旅。今や人口260万を数える大都市に発展している台北市だが、その歴史は随所で日本と関わりをもち、結ばれている。今回は台北市東部の南港区と信義区に残る日本統治時代の遺構をたどってみたい。

台北市南港区を訪ねる

南港区は台北市の東部に位置している。台北盆地の東辺部にあり、日本統治時代は台北州七星郡内湖庄に属していた。終戦を迎え、1946年7月に台北県南港鎮（鎮は町に相当）となったが、後に台北市に編入され、南港区となった。

南港の地名は古くから存在しており、清国統治時代の文献にも「南港仔」という地名が確認できる。これは基隆河の南岸に設けられた河港に起因するという説や、現在の基隆を「北港」とし、それに対して「南港」としたという説、現在の汐止付近にあった河港に対して南港となったという説があるが、詳細は不明である。

街の玄関となる南港駅は1899（明治32）年7月20日に開設された。日本統治時代を経て現在に



建設工事が進められている南港駅の様子。在来線とMRTの接続駅で、将来は台湾高速鉄道もここに延伸してくる。手前は南港瓶蓋工廠の敷地内の樹木。

至っている。ただし、もともとの駅は現在よりも東にあり、1986年に現在の位置に移った。

なお、2008年12月25日にMRT（都市交通システム）板南線が延伸開業し、台湾鐵路管理局線（在来線）も地下駅となった。2011年10月23日には駅舎も装いを新たにし、往年の様子を偲ぶことはできない。現在、台湾高速鉄道の延伸工事が進められており、2015年1月の開業が予定されている。

知られざる産業遺産

南港瓶蓋工廠は日本統治時代に設立され、戦後も長らく工場として機能してきた場所である。前身となった国産コルク工業株式会社は1941（昭和16）年に設立された国策企業で、翌々年に操業を開始している。

終戦後には南港瓶蓋工廠と改名されている。日本統治時代はコルクを製造していたが、戦後は「瓶蓋」という文字が示しているように、瓶のキャップや王冠などを製造していた。

戦時中に設けられたということで、言うまでもなく、軍事的な需要とも深い絡みがあった。しかし、数年後には敗戦を迎える。日本は台湾の領有権を放棄し、経営者たちも台湾を離れていった。施設は中華民国政府に接収され、運営も中国から渡ってきた官吏たちに委ねられた。それでもコルクの製造は引き続き行なわれ、多くの工員がここで働いていた。

工場としては2004年に操業を停止している。

その後の数年間は管理されることもなく、廃墟のようになっていた。敷地が広いので、うち捨てられ、荒れ果てていく光景は痛々しいものがあったという。しかし、そういった産業施設は独特の雰囲気を持つものである。徐々に知る人ぞ知る空間となり、ひそかに注目を集めたようである。時には映画やビデオクリップなどの撮影現場にもなっていたという。



工場全体を俯瞰する。手前に見える電柱は日本統治時代のものであると思われる。



日本統治時代の建物は3棟残っている。いずれも装飾を排したシンプルなデザインである。

産業遺産を護ろうとする若者たち

この工場は公開されているわけではなく、通常、内部の参観は難しい。しかし、時折、この空間を用いてイベントや展示会などが行なわれることがあり、そういった時を狙えば、内部を見ることが出来る。私は縁あって知り合った台北在住の杜崇勇さんから連絡をいただき、訪ねることができた。

杜さんによれば、現存する建物の中で、日本統

治時代に建てられた家屋は全3棟あるという。いずれも簡素なデザインだが、しっかりとした作りである。天井が高く、空間の広がりを感じられるのはこういった工場建築の特色と言えるものである。

これらの建物はいずれも取り壊しの危機に瀕している。なんとかしてこの建物を保存し、後世に伝えていきたいと願う若者たちは職業や立場はそれぞれである。しかし、郷土を愛する気持ちは強く、そういったものによって有志たちはしっかりと結ばれているようだ。発展著しい台湾だが、こういった根源に着目し、自らのアイデンティティを模索する人々は確実に増えている。

保存運動の中心人物である林怡君さんに話をうかがった。現在、この建物は新しく整備される駅前周辺の再開発事業によって取り壊しが予定されているという。しかし、戦時中に建てられた産業施設であることや、戦跡であること、さらに敷地内に繁茂した樹木の存在など、歴史的意義は決して小さくはない。林さんたちは台北市に産業遺産としての保護を訴えており、折衝を続けているという。



建物の壁面に見られた「TR 煉瓦」。日本統治時代に台湾煉瓦会社が製造した耐火煉瓦である。



天井の高さが空間的な広がり演出している。日本統治時代の倉庫。屋根を支える梁が存在感を示している。

遺族と古老の証言を得る

2013年12月9日、国産コルク工業株式会社の創業者である宇坪敏男氏の遺族が当地を訪問した。福井在住の宇坪啓造氏と啓一郎氏で、有志たちはこの機会を心待ちにしていたという。正直なところ、この工場についての史料は多くない。この日はメディア関係者も多く駆けつけていたが、限られた状況の中、遺族から語られる貴重な証言に耳を傾けていた。

この時には台湾で最大の発行部数を誇る自由時報の発行人、呉阿明氏も訪れていた。この工場で働いていたという経験を持つ呉氏は68年ぶりに往時の職場を再訪したという。数々の思い出話のほか、創業者宇坪氏のことや、自らの戦争体験についてのエピソードを懐かしそうに語っていた。

呉氏によると、戦時下、警戒警報が鳴り、続いて空襲警報が鳴ると、工員たちは防空壕に避難したという。その防空壕は敷地のはずれに今も残っており、鬱蒼と生い茂った樹木の下で口をあけていた。日本統治時代に設けられた避難用防空壕が

残っているケースは多くない。

宇坪啓造氏は、こういった遺構を残してもらうことへの感謝の気持ちを述べると同時に、「無理のない保存方法を検討していただき、維持して欲しい」とコメントしていた。現在、有志たちはこの空間を芸術創作の場としての整備することを希望している。この先、保存の決定までの道のりは長いかもしれないが、行く末を見守りたいものである。



戦時中に日本人によって設けられた工場施設。この建物は1942（昭和17）年に竣工したもの。



現在、この跡地を歴史空間の再生事例として公共スペースにするよう、請願運動が起こっている。敷地内には日本統治時代の防空壕も残っている。



創業者である宇坪敏男氏の子息である啓造氏と自由時報発行人の呉阿明氏を囲む報道陣。

家畜市場にあった石碑が残る

台北市信義区に知られざる石碑が残っている。

日本統治時代、台湾にはいくつもの屠殺場（食肉加工場）が設けられていた。屠殺場そのものは清国統治時代にもあったが、衛生管理の観点から、台湾総督府はこういった場を公的機関が管理することを規定し、運営させていた。

人口が多い台北市の場合、市内では萬華と大稻埕の二か所に「家畜市場」が設けられていた。これは豚や鳥、牛、馬、羊などを交易する場であり、同時に屠殺場でもあった。当初は台北州が管轄していたが、1920（大正9）年からは台北市が成立したことを受け、市営となっている。

のちに、台北州七星郡に属していた松山庄が台北市に編入されると、松山と三張犁にも家畜市場があったため、これは分場として扱われることになる。なお、萬華の屠殺場は1930（昭和5）年に閉鎖されている。

大稻埕の家畜市場は戦後、激増する需要に応えることが難しくなったために移転を果たした。現在、その敷地は蘭州市場、大同区行政中心（区役所）となっており、往時を偲べるものは存在していない。

移設されて残された畜魂碑

しかし、この家畜市場にまつわる遺構が、台北

市内のはずれに残されている。ほとんど知られていない存在なので、私自身、赴いてみるまでは、本当かどうか半信半疑の状態だった。そして、実際に訪ねた際も、なかなか探し出せず難儀した。

その遺構とは「畜魂碑」と呼ばれるものである。これは家畜市場では比較的よく見られた石碑で、名称は「獸魂碑」とされることもあるが、台湾ではここ以外にも北投や淡水、嘉義、そして嘉義県の朴子など、数か所に残っている。

これは命を奪われる動物の霊を慰めるべく設けられたものである。日本特有のものと言ってもいい。しかし、台湾の人々も動物の霊を慰める発想はもちえており、石碑は人々によって護られた。そして、家畜市場が閉鎖される時も、移設の上でここに安置されたと推測できる。

畜魂碑は台北市信義区の天寶聖道宮という寺院にある。石碑は寺院の入口に設けられたゲートの傍らに残されていた。

畜魂碑は道路を見おろすような小高い位置にあり、石段が設けられていた。上がってみると、高さは2メートル近くあり、それなりに立派なものである。碑陽には「畜魂碑」と三文字が刻み込まれている。

日本統治時代の石碑は台湾各地に設けられていた。その総数は知ることができないほどだったが、敗戦で日本がこの地を去った後、中華民国政府は前支配者の遺物を「敵性遺産」として扱った。日本との関わりがわずかでも感じられる石碑は倒されたり、文字を削り取られたりした。しかし、畜魂碑に関しては、ここに限らず、ほとんど無傷であった。その理由は外省人たちが「崇りを恐れた」からだと言われ、手を触れることさえなかったという。

結局、大稻埕の家畜市場が移転する際、人々は畜魂碑をこの場所に安置することを決めた。どのような経緯でこの場所が安置先に選ばれたのか、詳細は不明である。案内板があるわけでもなく、

訪れる人が多いとも考えられないが、石碑を眺めていると、今もなお、動物たちの霊を護っているように思えてならない。



畜魂碑。大稲埕の家畜市場が取り壊された際、この石碑だけは移設の上、保存された。



指南路1段14巷の道路端に残る小さな畜魂碑。こちらは食肉加工場にあったもので、文字はほぼ無傷の状態だが台座はなく、管理されている様子はない。

信仰の場へと変わった防空壕

最後に、軍隊が作った防空壕を紹介してみたい。

戦時中、日本人は台湾全土で数多くの防空壕を造った。その具体的な数は不明だが、至る所に設けられていたのは事実である。それらは戦後も続けて使用されたものが少なくない。しかし、時代は変わり、こういった戦跡は年々少なくなっている。

台北市信義区は日に日に巨大化する台北市の新都心と呼ばれるエリアである。日本統治時代、こ

の一角は空地が広がっていたという。しかし、昭和時代に入ると陸軍が管理する土地となり、兵廠などが置かれていた。これらは戦後も中華民国軍が使用し、中国から渡ってきた外省籍の人々の居住地にもなった。

その東のはずれに防空壕が残っている。もちろん、防空壕として現役なのではなく、その洞を利用した廟になっている。この情報は台北で生まれ育ったという古老によって教えられた。廟とは言っても小さな祠のようなもので、台北市を見おろせる象山という小高い丘の頂部にある。そこまでの道は整備されているが、石段が続き、徒歩では少なくとも半時間を要するという。

奉天宮という名の大きな廟を目標に坂道を上っていく。この廟は台北では指折りの規模を誇り、多くの参拝客で賑わっている。見上げるまでに大きい廟宇にはきらびやかな装飾が施されている。

この廟の後方にのびる石段を上っていった先に防空壕はある。石段を踏みしめるたびに汗が吹き出し、息もきれるが、眺望はそんな苦しさを忘れさせてくれるほどの素晴らしさである。空気も同じ台北のものとは思えないほどに清々しい。

頂上に着いてみると、そこには巨大な蒋介石の像が立っていた。銅像を軽く見やりながら進んでいくと、小さな廟が見えてきた。周囲をトタン板で囲んだ簡素な造りだが、入口には立派な看板が据え付けられ、「龍山宮」と大きな文字が記されている。廟の管理人であろうか、老人が退屈そうにお茶をすすっていた。

老人に声をかけると、廟の内部を案内してくれた。歩を進めると、そのまま洞窟になっていた。ひんやりとした空気を感じながら進んでいく。その構造は確かに防空壕である。壕内は高さが2メートルほどあり、幅も狭くはないので、移動に不便はない。

壕内には計5つの祭壇が設けられている。それぞれが独立した状態で、小さなものだが、参拝に

やってくる信徒は少なくないようで、線香の煙は絶えていない。こんな山の上までいったい誰がやってくるのかと思案していると、詣で帰りらしい老人が声をかけてきた。

この老人は旧制台北第二中学の出身で、日本語はまさに日本人並みか、それ以上に堪能で、かつ饒舌だった。久しぶりに日本語を話すと謙遜しながらも、流れるような会話をこなす。

氏によれば、ここは防空壕ではなく、高射砲を備えた陸軍管轄の秘密基地だったという。しかし、居合わせた別の老人は防空壕であったと主張して譲らない。さらには軍隊の倉庫だったと主張する老人も現れた。そして、瞬く間に日本語の議論が始まってしまった。

結局、戦時中、ここへ避難した経験があるという老人が現れ、この廟は防空壕だったということで議論は終わった。ただし、戦時中に設けられた防空壕の一つ一つに文献と呼べるようなものは存在せず、全容はつかめなかった。学徒動員か何かで工事に携わった経験を持つ人を探し出せばいいのだが、それも難しい。埋もれかかった歴史、



防空壕は戦後も使用されていたが、ここ数年は放置されていたという。当時は防空壕であると同時に倉庫でもあった。現在は塞がれているが、かつては通気口を兼ねた砲口もあった。

中でも戦跡に関する史実に確証を与えることは難しい。

そのうち、老人たちは日本統治時代の思い出話に花を咲かせた。先ほどまで交わされていた激しいまでの議論はどこへやら、それぞれの少年時代を振り返ってすっかり盛り上がっている。お茶を勧められるままに、昭和初期の台湾の世相について、いろいろな話をうかがうことができた。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けているほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾 鉄道の旅』(JTBキャンブックス)、『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『観光コースでない台湾』(高文研)など。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』(玉山社)などの著作がある。台北生活情報誌『悠遊台湾・2014』を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>